



宇和島闘牛の多くは、こちらも闘牛が盛んな島根県隱岐島や鹿児島県徳之島の牛の血を引く。競走馬のように血統が重視される。写真は大関「下城」



愛情を注いで育て上げた牛が激戦に勝利すると、世話をした子供が背中で勝鬨を上げる

歴史が宿る宇和島闘牛



A／ソーシャルディスタンスを取るため600人のみが観戦できた B／宇和島に根付いている文化としての闘牛。男の子も女の子も大人に混じって大会を盛り上げる C／地元有名料理店「有明」の弁当はお昼前には完売



会が発足、大会(興行)が再開された。1974年には「宇和島市闘牛運営審議会」が設立され、翌年3月、宇和島市は全国にさきがけて全天候ドーム型の闘牛場を完成させた。これより、定期的な闘牛大会、申し込みによる随時の

観光闘牛が開催され、施設の斬新さやおりから国内観光ブームもあって、宇和島の闘牛は再び活況を呈した。続きは月刊アミューズメントジャパン1月号をご覧ください



牛が吠える、闘う

宇和島地方独特的民俗文化である闘牛は、全国でも行われている地域が数えるほどしかない。闘牛は時間無制限で、1分で勝敗がつく試合もあれば、40分を超えるほど長い試合もある。過去には、2時間40分という記録も伝えられている。1トンを超える牛の頭がぶつかり合う瞬間の「ゴツッ！」という音が闘牛場に響き渡る。

農耕用の牛の導入とともに始まったとされる宇和島の闘牛。始まりは鎌倉時代とも江戸時代とも言われている。

しかし、農業の機械化と都市化が急速に進んだことによって闘牛は衰退に向かい、1955年春の和靈土俵場所を最後に闘牛大会は幕を閉じた。その後1959年、闘牛復活の気運が盛り上がり、宇和島闘牛振興委員会が発足、大会(興行)が再開された。

明治、大正期には闘牛の禁止ないしは規制が繰り返されたが、庶民の闘牛熱は冷めなかつた。大正期から昭和初期には最盛期を迎えて「突き合い」などと呼ばれる市民にとって身近な娯楽だった。



2メートル超えの闘牛オブジェが来場者の興奮を煽る



宇和島市営闘牛場は丸山山頂にあるドーム型の施設